

令和元年度 長野県立歴史館協議会 議事録

1 日 時 令和元年 7 月 24 日（水）13 時 30 分から 15 時 40 分まで

2 場 所 長野県立歴史館 会議室

3 出席者

○委員（五十音順）大西紗希子委員、小林正春委員、小松芳郎会長、中澤英治委員、
中條智子委員、中村孝子委員、山崎まゆみ委員、若林由美子委員
（欠席 久留島浩委員）

○県立歴史館 笹本館長、久保副館長、福島学芸部長、寺内総合情報課長、西山考古資料課長、小野文献史料課長 他

○県教育委員会 文化財・生涯学習課 小林課長、青沼主任

4 会議に付した事項

- (1) 平成 30 年度事業実施状況について
- (2) 令和元年度事業について
- (3) その他

5 会議内容

(1) 開会

（久保副館長）

それではただ今から、平成 30 年度長野県立歴史館協議会を開催いたします。
会議に先立ちまして、笹本館長からご挨拶を申し上げます。

(2) あいさつ

（笹本館長）

委員の皆様には本日は、お忙しい中、お集り頂きまして誠にありがとうございます。幸いなことに今年開館 25 周年を迎えることができました。ただ、25 周年はひとつのステップに過ぎません。我々としましては、将来を見添えてしっかり前にすすめてまいりたい、そのためには、皆様からこうあるべきだという方向性をお示しして頂ければと思います。皆様からいただいたご意見を少しでも実現するように職員一同がんばっていきますので、是非忌憚のないご意見をいただければと思います。どうぞよろしく申し上げます。

（県教育委員会事務局 小林文化財・生涯学習課長）

皆様こんにちは。文化財・生涯学習課長の小林です。笹本館長に 28 年度から就任して頂き、活発になってきたなあと感じます。特に、地理的に見ると長野県の北部に歴史館が偏っているので、中南信でも出前講座とか、お出かけ歴史館とか取り組んでもらっています。今年は、25 周年ということ企画が目白押しですが、是非とも皆様のご意見をいただく中で、来年以降歴史館のあり方を検討してまいりたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

(3) 出席者自己紹介

(4) 会議成立報告

(久保副館長)

ここで会議の成立について報告いたします。お手元の委員名簿のとおり、委員総数は9名であります。本日は8名の委員の方にご出席いただいておりますので、長野県立歴史館管規則第4条第3項の規定により会議が成立していることをご報告いたします。

(5) 正副会長選出

(久保副館長)

なお、本日の会議は新しい任期の最初の会議となりますので、議事に入る前に、協議会運営細則の規定により正副会長を選出いただきたいと思います。細則では、委員の互選によると規定されていますが、いかがいたしましょうか。

(中澤委員)

事務局で何か考えがあれば、提案していただきたいと思います。

(福島学芸部長)

事務局案として、会長に小松委員、副会長に中條委員をご提案させていただきます。

(久保副館長)

ただ今、事務局案として、会長に小松委員、副会長に中條委員をご提案させていただきましたが、いかがでしょうか。(了承される)有難うございました。それでは、会長を小松委員に、副会長を中條委員にお願いいたします。なお、規定により会長が議長を務めるとされていますので、これからの進行は小松会長さんをお願いいたします。

(小松会長)

ただ今、会長に選出されました小松です。(以下、挨拶)それでは、次第に従って会議を進めたいと思います。はじめに議事の1を議題とします。事務局から説明をお願いします。

6 議事(協議事項)

(1) 議事(その1)平成30年度事業の実施状況について

○福島学芸部長

(配付資料「新たな歴史館の創造をめざして 長野県立歴史館の使命と目標」説明)

○小松会長

ありがとうございました。大変多岐にわたり平成30年度の評価表について、ご質問、ご意見を伺っていきたいと思います。

私から一点お願いします。

古文書の目標値のうち、新規史料の収集3,000点以上とありますが、実際には18件 8,374点と大変な数を収集しており、具体的にはどのような形で史料が入ってくるのか説明ください。

○小野文献史料課長

お手元の「年報」73ページをご覧ください。

概数を含んでおりますが、寄贈が8,130点、購入が244点となっており、文書名、内容については、年報に記載のとおりでございます。

○小松会長

これだけの量の文書を受け入れ整理しているというのは評価すべきことであると思います。そうしないと史料の散逸が進行してしまうので、しっかり取り組んでいただいておりますが、昨今の新聞報道でもありましたが、史料が県外へ散逸してしまっている状況のため、歴史館の役割として、地域の文書を守るという大きなものがあり、そういった意味では評価したいと思います。

続いて、「未来を写す歴史知識の泉としての役割を果たします」の各項目について、質問やご意見等ございましたらお願いします。

私から一点お願いします。

ティーンズ古文書講座の開催とありますが、これは平成30年度から始めたものですか。

○小野文献史料課長

平成29年度から始めたもので、今年度で3年目を迎えました。今年度はまだ開催しておりませんが、30年度の内容は「年報」49ページをご覧ください。

○笹本館長

補足説明をいたします。

当館で行っている若年層に向けた取組みは全国的に見ても当館のみで行っており、注目を浴びています。受講者数は決して多くありませんが、受講者は次年度以降も重ねて受講する状況になっており、成果は上がってきているものと認識しております。

○小松会長

資料の他の部分でもありましたが、シニア世代のみならず、これからの世代であるティーンズ世代に対して関心を深めてもらうためのこのような講座の開講は非常に重要なことであると評価したいと考えます。

折角の機会ですので、この部分につき委員の皆さまのご質問ご意見をお願いします。

○小林委員

このティーンズ古文書講座に関連し、他の分野へ展開することを検討されていますか。

○笹本館長

現時点では、当館の職員体制が最盛期の1/3程度となっている中で、全体としては業務を増やしており、例えば皆さまからの評価が高い「お出かけ歴史館」等の業務を各地で行っておりますので、当面はこれ以上業務を増やせない状況にあります。お出かけ歴史館事業は、そもそも歴史館に来たことのない子どもたちに興味・関心を持ってもらうことを目的に行っている事業ですので、委員のお話のありました「他の分野へ展開」に近いものとしては、このようなものがございます。

○小林委員

意見としてですが、かつて長野県の殆どの高等学校で地歴や郷土関係の部活動がありましたが、現在はほぼゼロに等しい状況のため、こういった状況を打開するのは県立の組織が行う必要があると考えますので、ひとつの課題として考えていただくと良いのではと感じました。

○笹本館長

委員ご指摘の郷土研究関係について、全滅に近い状況にあります。

その一方で「信州学」という新たな講座を設け、地域を学んでいこうという動きもありますので、その辺も含めて私や長野県教育委員会も考えていきたいと思えます。

私たちが、歴史館版の「信州学」を作ったのは、高校生辺りをターゲットにしてやさしくふるさつを見つめなおしてほしいという思いもありますので、委員からいただいたご意見に少しでも応えていきたいと考えております。

○小松会長

他にいかがでしょうか。

では、資料裏面の各項目についてご意見・ご質問等ありましたらお願いします。

私からで恐縮ですが、出前巡回講座の開催のうち「県立歴史館の信州学講座」及び「長野県の遺跡発掘 2018」を除く上記以外の出前講座が開催数 90 回、参加者数 8,000 人という目標を立てておりますが、先に館長から話があったとおり限られた職員体制の中で、このような目標は大変なものと感じており、必然的にC評価となってしまいますが、この辺についてはどのように考えておりますでしょうか。

○笹本館長

ややもすると前年度から上に上にと目標を設定してきたわけですが、会長が仰るとおり職員に対し過大な負担を強いてきてしまっているという現状がございますので、私どもとしてはこれから先、現状維持あるいは下に下げることも含めて計画を立てていかなければいけない。長野県全体の人口が減っている中で従来と同じ形での設定では無理だということを考えています。今回Cが付いていること自体がそうしたことの方向性を示していると思っています。

ただ、目標は今年度までは形が決まっているため、これから以降はそのような方向で考えていきたいと思っています。

○小松会長

これに関連し、出前授業の目標が 25 回・参加者 1,000 人がC評価となっておりますが、これも先ほど説明があった背景があるということでしょうか。

○笹本館長

今お話のあった部分はもうひとつ要因がありまして、先方の要望の有無という大きなものがあり、当館としてはこの程度は可能と考え目標を設定しましたが、先方から要望が無い限りは、こちらから行くことができないため、ともに内容とすれば、他県の状況と比較するとかなり頑張っている状況であると、館長としては認識しております。

○小林委員

計画自体に無理があったと判断はできますが、中長期の目標の中で設定された計画であれば、結果としてこういう形になるというのであれば、やはり今後の計画の中では適正な数値を判断した上で組み立てていく、その中では可能な形若干の負荷をかけるくらいで目標数値を設定して、それを今後活かす形にする、ということが大事かと思います。

○笹本館長

今後は、歴史館に何人来たというよりも、例えば図録が何冊売れたか、長い時間の中でどのくらいの影響力をもってきちんとやっているということの評価できるようにしていきたい。

○福島学芸部長

出前講座については、内容を充実させ多くの要望に応えていくという部分もありますが、数を目指ることについては相手のあるもののため、なかなか難しい側面がありますので、要請に対してどれだけ応えられたかというパーセンテージを令和元年度の目標にさせていただき、要請のあった部分については応えていけるように、例えば出前授業であれば100%応える、出前講座であれば当館学芸員が80%以上応えていくという目標にしながら、内容の充実とともに取組んでいきたいと考えております。

○中村委員

学校教育の中のところで、その学校独自に使っているものがあるとそれぞれが検証していきたいということがあるので、学校が利用するかということでは難しいところがあると思います。利用率となると学校の事情があるので、中身も見直すなどしていただくといいのかと思います。

○大西委員

八十二文化財団は歴史館の職員に大変お世話になっておりますが、関係機関との連携の中で教養講座をいくつか開催しているので、そういったもので連携できるものがあれば、一緒にできればと思います。

○笹本館長

私どもとしても、講座等を効果的に開催するために数を多く行えばよいという考えではなく、様々な要望に対し独自で行うのが大変になってきておりますので、いろんな形で連携をしていき、双方にメリットがある形に少しでももっていきたいと考えております。

一方で講座等呼ばれる方がどうしても同じ方に偏りがちな傾向にあり、私としては当館の最も重要な資源は当館学芸員の方々と思っておりますので、お互いにとってプラスとなるよう連なっていきたいと思っております。

○中村委員

教職員の研修のところ、いくつかこの館を活用した研修を開催しており、通常教職員の研修は塩尻の総合教育センターで行うことが多いですが、この館を利用する研修の際に、県内でもこの館から遠方にあたる木曾や上伊那・下伊那等の地区の方、高校のみならず義務(小中学校)の教職員も参加しておりますので、参加する教職員がいるとその地域で利用するということがつながってくるので、教職員研修で歴史館を利用できることはありがたいと感じています。

○小松委員長

最後の「楽しむ場・憩いの場・交流の場としての役割を果たします」の各項目についてご質問やご意見等がありましたらお願いします。

では、私から、ボランティアのところはどのような理由でB評価でしょうか。

○福島学芸部長

目標設定は先ほど館長から話がありましたように、前年度より多くという観点で設定されております。内容的には非常に良くやっていただいたという点からA評価でも良かったのですが、前年度と比較してという観点から「目標とおおり」というB評価としました。

○山崎委員

ボランティアの立場からは、毎年同じようなイベントを行っていて、最初に始めた頃に比べて人数が減ってきていると感じています。

体験ではなく解説に関しては、当初から何人か増えてはいますが、一時期からその人数以上は増えない、研修されている方はいますがなかなか増えてこないという現状があります。

利用者アンケートについて、私もボランティアの際その場で案内し「良かった等」のご意見を伺うことはありますが、アンケートまで記入いただくというケースがあまりなかったので、今後は案内等を終わったあとに一声かけようかと考えています。

○笹本館長

ややもすると私どもはボランティアの方におんぶに抱っこ状態にあったように思います。

サポーターという位置づけで、私たちを育ててくれたり一番身近で応援いただいているのがボランティアの皆さんと考えておりますので、学芸部内にボランティアルームを設置したり、年に一回ですが学芸員と情報交換会を開催し、仲間意識を深めていく取り組みをしております。

ただ、人数の増減について、昨今の人口の流動性等を勘案すると右肩上がりに…とはいかないと考えております。しかし、今年25周年の特別企画第一弾のオープニングの際にはボランティアの会長さんにテープカットに参加いただくなど、いままでとは異なりお互いに仲間意識を持ち尊重できる関係をつくりつつあります。

○小松委員長

他にご質問・ご意見等はございますか。

評価については、説明のあったとおり、今後の目標設定も含めて検討をお願いしたいと思います。

では、平成30年度の評価は資料のとおりといたします。

このほか、全体を通して何かございますでしょうか。

○小林委員

今回の評価内容が目標に対しその評価が明確になっているので、基本的に自己評価内容の妥当性が極めて高いと判断できます。

気になった点として、これからの課題となりますが「提供」という言葉を多く使用していますが、主体は県民と考えますので、「提供」だと「館」が主体となる場合なので、この辺りは「情報発信」等、受け手側を考えた用語を組み足してもらえると、県民主体の観点で館がどのような事をできるのかということになると思うので、「提供」という言葉にやや違和感を感じました。

○笹本館長

委員の仰るとおりと考えます。

館は今、職員一丸となって、県民の皆さんに文化的な視点でどのような事ができるのかということを真剣に考えておりますので、委員にいただいたお話を踏まえて、思い至らなかった点を反省してまいります。

○中條委員

歴史館パートナーの日が年2回開催されたが、通常の開館と異なり、パートナーとなった方々(企業関係者等)が沢山来館していただき、皆さんの観点が変わって良かったと思っておりますので、このような取組みは続けていただきたいと思えます。

○笹本館長

当該事業に関しては、「実験」という位置づけで行っており、KOA さんにしろ長野都市ガスさんにしろ私どもから声をかけて開催したのですが、今後は公募形式に変えて続けていきたいと考えております。

一方で、先ほども申し上げましたが職員数が限られていることや様々な企画を既に開催しておりますので、数はそれほど増やせない中で効果的かつ県民の皆さんにとってもいい形で開催できるよう検討してまいりたいと思えます。

○若林委員

お出かけ歴史館事業について、下伊那、木曾地域での開催したとありますが、それ以外に例えば夏休みのイベントや5月・7月・11月の公開したイベントは地元の子どものほか中南信地域の子どもはおりますか。

○笹本館長

私どもで承知しているのは、来館するのが近隣の子どもたちが多いことです。

このため、私がこの館に赴任した年に「木曾の宝」という企画展を開催し、これで初めて木曾地方と当館がつながることができました。

このことを前提として、歴史館は地域に出でいかねばならないという考えに至り、お出かけ歴史館事業を始めました。ですので、敢えて木曾や伊那といった当館から遠方にあたる地域はお金もかかるため、なかなか当館に来るの難しい地域に「ぜひおこください」とPRはしていますが「遠い」という壁を越えるために、限定的に伊那・木曾という地域を出している状況です。

ただ、職員の話を見ると、こういった地域に出向くと皆さん非常に喜んでくれ、展示品などを生き生きとした表情で見ってくれるといった話を多く耳にします。

これらを踏まえると、当館にいつも足を運んでくれる子どもはどうしても地元の子どもが大半でありこれをどのようにして変えていくのかは私どもの課題であり、同時に近隣の方が特別な利益を得ているという感想を持って欲しいという思いも持っております。

○若林委員

逆に地元の子どもたちにとって、長野県立歴史館がこの地にあるということのメリットに気づいてもらい、教職員もそうですが保護者も機会を作って子どもたちにつなげていって欲しいと常々思えます。

○小松委員長

他にご意見はございますか。

なければ、議事その2 令和元年度事業について を議題とします。

事務局から説明をお願いします。

○福島学芸部長

配付資料「令和元年度 長野県立歴史館の活動計画(目標)」

「令和元年度 長野県立歴史館 事業計画概要」

「平成30年度 包括外部監査 結果報告書(抜粋)」

「新たな歴史館の創造をめざして-長野県立歴史館中長期目標(2009~2018年)

にかかわる達成度について(自己評価)」

「『こどもむかし館』(仮)の新設に向けて」

に基づき説明

○笹本館長

私が着任して気になったのは、現代コーナーが何もなく、広さを考えるとどうしたらいいのかという事を最初に考えました。

一方で、国内の博物館を見てみると、人気のある館は子どもたちに対する配慮が手厚くされている現状があり、例えば石川県にある金沢21世紀博物館は小さな頃から行くので、大きくなってからも行くという、周囲の大きな博物館は全て子供用のコーナーを設けて、子どもたちが遊びに行くところからは始めている。

最初に私はこの二つを結びつけるために「親と子の近代」という足りない部分をやるために動き始め、場所がないためこの会議室を…とも思いましたが、目標は一体何かということ冷静に考え、子どもたちに来てもらい、又きてもらえるようなしっかりとした形にしていく事が必要ではないかと考え直し、一方で展示の問題はきちんとリニューアルしなければいけないと考えて、目標の達成状況やその対策、今後のスケジュールをお示ししておりますが、ここで私どもが考えているのは、大規模リニューアルを10年後に行うことを念頭にしており、このような状況を踏まえると、現状の当館最大の悩みは、企画展示室の広さが他の博物館と比較して1/4程度しかなく大規模な企画展示ができず、どのようにして企画展示室を広げるのが大きな課題となっております。

子どもの展示と企画展示室を考えるならば、現状の館の外へ新たにもっていくしかないという結論に至りました。その中で、現在の図書室を外に出せば、企画展示室の面積は一気に増えます。そういった様々な問題をクリアするには別棟であり難しくなく、子どもたちが集える空間を創ってあげたい。これはこのまま現在の長野県の施策である「学びと自治」に結びつきます。

なぜ35周年に結びつけるかと言いますと、長野県からこの建物を70年間使用するよう指示を受けており、通常20年でリニューアルするのが普通ですが、25年経過した当館は何も行われておらずリニューアルの方向性もない現状です。そう考えると、70年の中間である35年でどうしてもリニューアルを行わないと、当館は社会の要請に応えられないと考えています。

こういったこともあり、何としても子どもに焦点を当てた施設を作りたいと考えます。内容については、皆さまのお知恵を拝借しながら作り上げていきたいと思っております。

○小松委員長

ただいまの説明に関してご質問・ご意見などありましたらお願いします。

令和元年度の事業計画よりも、中長期計画や子どもむかし館といった将来的な展望について特にお願いしたいと思います。

○大西委員

私ごとですが、現在妊娠しており「子どもむかし館」が完成する頃には小学生になってしまいますが、長野県内で子どもが騒いでも大丈夫な施設はなかなかないと感じており、赤ちゃん連れでも問題なく利用できたり、無料の駐車場が完備された施設は少ないと思いますので、ぜひ実現できればと考えます。

○若林委員

就学前からの子どもが対象となるので歴史を学ぶというより、昔と今をつなげる教育というか、先人の知恵や物の無かった時代にいろいろ工夫して作り上げてきたものや物がなくとも家族が幸せに生きてきた歴史や地域とつながって生きてきた歴史を学んでもらいたいという意味では、先ほど大西委員が仰ったように小さな子どもが「また行きたい」と言うような子どもむかし館があると良いと思います。

私の孫が佐久市にある「子ども未来館」行きたいと言い、これまで三回ほど連れていっていますが、孫が佐久市まで「行こう」という動機になっているのが、大きな恐竜やプラネタリウムなど子ども向けのゆっくり遊べて保護者がハラハラしないで済むような魅力的な施設があり、それはここではなくても良い気もしますが、県立ですのもう少し集まりやすいエリアであってもよいかもしれませんが、お話にあったような子どもむかし館ができれば良いと強く思います。

○笹本館長

私はどちらかと言うと親子ふれあいの場で良いと考えています。

「親子」という概念がどんどん変わっており、展示もどんどん古いものとなってしましますが、親と子の関係は未来永劫ずっと続いていきますので、つまり両親の父母が遊んだものが今の子どもたちは遊んでいないので、それを接触させるだけでも意味がありますし、ゲーム機ひとつとっても親の世代と今の子どもでは大きな違いがあります。わずかな間の差みたいなのをどこかで触れ合いながらそこで会話が生じるような空間を作り出したいと思っています。

ひとつ言えることは、子どもたちがいろいろな人たちと触れ合える空間を作り出していかねばと考えております。

従前のように教えるためのツールとしての博物館では次の時代につないでいくことはできないだろうと考えています。

先ほど若林委員からお話いただきましたが、必ずしもここである必要はないのかもしれませんが、長野県としてこのような施設はひとつとしてないのが現状で、他県では科学館や未来館や子ども館といったものが必ず用意されておりますが、それすらない中で歴史館としては、歴史をベースとしながら触れ合えるような空間を用意し、それだけでなく、歴史館が大きくなっていくために今後リニューアルの第一歩となるようななんとかやっていきたいと考えております。

私たちの思いと協議会の委員の皆さまの考えとを連動しなければ、私たちだけでは動けませんので、長いスパンでこのような方向性を委員の皆さまからご協力いただければ前に進め

るのではないかと考えております。

○中村委員

私たち世代でも実態がわからない事が増えてきており、例えば養蚕について授業等でおじいさんやおばあさんの世代では飼っていた人が多いという話をしても、おじいさんおばあさん自体が若くてそのような事に触れていないケースが多いので、歴史のコンセプトとして他の館と被らないように独自のものは必要と思うので、例えば休みながら親と子が蚕の実物がある桑の葉を開けてみるような体験ができるとか、このようなものだと繊維学部と連携・協力するケースもあると考えられますが、子どもが土にふれるとすごく安心するというのもあるので、土器とはいかずとも土粘土のようなものをこねて遊べるよという感じで、昔の歴史上の人は仕事としてやってきたものだとしても、今の子どもにとっては新鮮に感じるものもあるので、ゆくりとそのようなものを触ったりといったことが体験できる施設があればいいなと思い、期待が膨らみます。

また、情報発信という観点で、インスタ映えといった記述も資料にあります、ツイッター等で情報発信することもあると思うので、こういった情報ツールに長けた世代が今後親世代となるので、こういった世代にターゲットを絞った事も行うべきと感じます。

先ほど、アンケート回収率が低いとの話がありましたが、こういった情報発信ツールをうまく活用することで、幅広い世代に興味を持っていただくきっかけになると思います。

○山崎委員

子ども対象施設及び館のリニューアルにつき賛成です。

今回提示のビジョンに「博物館」という言葉は多く出ていますが、先日私も耳にした話で「県立歴史館」という言葉自体が非常に敷居が高く、ここはどのような所なのかという意見が多いです。

このため、例えば「県立歴史博物館」など言葉自体も変わるとうれしいと感じます。

解説ボランティアをする中で、常設展示の展示物がどんどん傷み、いつの間にかなくなっているという展示物もあります。

小さな子どもが集まるには遊ぶスペースが一番ではないかと思えます。

先日も子連れの母親が子どものときに来た事があるとのことで、子どもの時分に「こんなことがあったんですね」と感動していました。子どもときの体験が大人になっても続くような歴史館であって欲しいと思います。

○中澤委員

4月から隣の森將軍塚古墳館に赴任していますが、様々なことを学ばせてもらいました。

普段行っている授業をしっかりとPDCAサイクルに載せて今後を考えていく、その中で、挑戦的に子どもむかし館の構想はすばらしいものだと感じます。

○小林委員

こどもむかし館の構想は良いと思いますが、歴史館でなければできない事を考えていくべきだと思います。

今は子ども館や図書館といった様々な子供向けの施設がありますので、他の館と連携してできる内容を敢えて歴史館で行う必要はないと思いますので、構想を進める中でそういった精査をきちんと行うべきと考えます。

本日提示いただいた資料を精査してみると、今年度取り組む内容の中では、せっかく日本遺産として位置づけられた縄文については、きちんとそれをうたい文句として使っていかなければならないと思います。これは積極的に使うべきですし、県民に誇りを涵養できる材料足り得るので、それを動かせるのは歴史館しかないので、協議会のメンバーは各市町村の立場でものを言いますが、長野県としての立場で動くのは歴史館であるべきですし、基本的にはそれが全県に広がっていくことによって認識が深まっていくと感じます。

具体的取り組みの中で考えていくのは、こどもむかし館の中に SNS、インスタ映えについて謳われていますが、これは常設展についても、今館内にいるスタッフだけではなく特定のボランティア+αの方の意見を聞いて、先ほどうさぎの話がありましたが、インスタ映えさせることは、固定観念にとらわれない人種でなければできないと思いますので、そういった人材発掘を行う工夫が必要だと思います。

企画展や特別展に対するマスコミへの講演活動はきちんとされているようですが、テレビへの露出度が極めて低いと感じます。歴史館の活動がテレビで放映された事例はあまり目にしないので、露出度を上げる工夫が必要で、それにより、行きたいと思う施設の位置づけを県民に知らしめる可能性が高いと思いますので、マスコミへどう露出するかという点について検討課題の一つにおいていただくと良いと感じます。

一番大きな点は、本日本庁の方もいらっしゃるのですが、ぜひお聞きいただきたいですが、財源の確保とスタッフの充実がないと、これからの運営はままならないと思いますので、計画を立てた以上、それに見合った資金が確保できることと、人材が確保できるという方向性を連動させた形で中長期の目標と、各年度の計画を作成していただくことが必要だと思います。

○山崎委員

館長の話にあったように常設展が長い間このままで良いのかと考えており、ここに子どもがどのようにかかわっていけるのかという点をどうにかしたいと常々思っていました。

予算等の制約で外に出すことが難しいとの話を聞いておりましたが、今回提示のように思い切って外に子どもたちと触れ合える場所を作りたいという構想を出してもらい、大変ありがたいと感じており、協議会の皆さまの力を借りながら、後押ししてこれを実現させたいと思っています。

○小松委員長

今年度中に中期ビジョンの総括及び中長期目標の策定が行われるとのことで、開館 25 年が経過し県民に次の時代に必要とされ愛する歴史館となるために 6 項目挙がっています。常設展示のリニューアル・子ども対象とした新施設の建設・企画展示室の充実・収蔵庫の増設・計画的な施設設備のメンテナンス・職員体制の充実、専門性の継承等、公文書館機能や埋蔵文化財に関する機能も今後必要となってくるということで、職員体制の充実も含めて中期ビジョンの策定、総括の方もしっかりとやっていただきたいと思います。

議事に「その他」とありますが、委員の皆さま何かございますでしょうか。

○中村委員

議事と関係ないかもしれませんが、人を呼ぶという観点から、例えば喫茶のお店の前に古墳の形をした「古墳なんかカレー」や「古墳パンケーキ」みたいに誰もが飛びつくようなちょっとした話題性のあるものを提供すると、テレビ等で取り上げてもらえるケースもあるので、みんなが気軽に歴史館へ行こうかなとなるように、せっかくあるものをうまく連携して足を向けたくなる仕掛けがあると、若い世代には良いのではないかと思います。

○小松委員長

その他、委員の皆さまからございますか。

事務局から何かありますか。

特にないようですので、少し時間を超過しましたが、以上をもちまして協議を終了し、議長を退任いたします。

ご協力ありがとうございました。

○笹本館長

ありがとうございました。

一つ一つ大事なご指摘で、例えば最後の中村委員のご意見について、実は博物館は火が使えないので、電子レンジで対応するしかありません。結果としてほとんどお客様が来ない状況で、人が来ない状況が悪循環となり今の状況となっております。

これを打破するためには、外に火を使える施設を作る必要があると考えております。

小林委員のご意見、大事な観点を頂戴いたしました。当館がしっかりやるためには人員がないとできません。私どもは仕事をきちんと行っていることをわかっていたくために様々な広報を行っていますが、当館からはかなり早い時期にマスコミへリリースするよう本庁所管課へお願いしても、本庁側で適切な時期にリリースを行わなかったケースが多々あり、手続き上の障害があると感じております。

私たちが一生懸命やっていることを実らせるためにはどうしたら良いのか、そのためには協議会の皆さんにできるだけ後押しをお願いしたいと思っています。

先ほどの子ども館の話も委員の皆さま誰一人として反対の意見はありませんでした。皆さまも同じ気持ちであるならば、具体的な話は検討する中で行えば良いのであり、これから外部の委員さんも含め様々な意見を聞きながら進めていきます。ただ方向性として正しいのか誤っているのかは非常に大事な部分ですので、皆さまのご意見を精一杯汲み取りながらかつ最終的には長いスパンで見たときに、今までどうしても各年度の計画の検討が中心となり、リニューアル等の大きな問題が一度も遡上しておりませんでしたので、それを何とか変えて行きたいと考えております。そのためにも引き続き委員の皆さまにご協力とできるだけ当館に足を運んでご覧いただき、ご意見を賜ればと思っています。

本日はありがとうございました。

○閉会（久保副館長）

長時間にわたり、熱心にご審議頂きましてありがとうございました。

以上をもちまして協議会を閉会いたします。ありがとうございました。

この後、ご都合に支障などございませんでしたら、企画展「県立歴史館の名品」をご覧くださいと思います。ご案内いたします。